電子工学科開設20周年にあたって

電子工学専攻主任　難波江　章
電子工学科主任　鈴木正夫

1976年4月，工学部の5番目の学科として電子工学科が発足し，以来20年目を迎えた．当時の卒業生も30歳代の後半となり，“若手教員”として指導にあたっていた私どもの年齢に達し，技術者として重要な役割を果たしている．そして，私どもも開設時にご指導いただいた古幡情司先生，藤沢義男先生，有賀正直先生，土屋英俊先生，川上元郎先生の年齢に近付いた．この20周年という一つの節目に，教育・研究活動の現状を紹介し，次の時代に向け新しい発展の礎を築きたいと考え，電子工学科・電子工学専攻を構成する5つの専門分野における最近の研究成果をとりまとめた．

開設当初は，6号館の実験室や研究室と言っても名ばかりのもので，実験台ばかりが目に付く有様で前任地の研究機関や教育機関との落差に声もでなかったと言うのが正直のところであった．しかしながら，開設前年度より赴任され諸準備を進められていた古幡先生は，臆することなく大学の近くに一室を借りられて夜遅くまで仕事をされ，カリキュラム編成は申すまでもなく学生募集から学生補導に至るまで，工学教育に関わる方法論や管理・運営に必要な事柄を私ども“若手教員”に伝授してくださった．学生食堂も十分な余裕がなかった当時，昼休みには全員ゼミ室に日課として集まり，様々な事柄について意見交換が行われた．このような日常の中で常に話題となった事柄は，学生実験や演習の在り方，高度な専門性と理論水準を教育指導の実践として，どのように具体的カリキュラムの中に反映させるかと言う課題が大部分であったが，先生は折りにふれ“どんな大学でも最初は2次，3次募集と門戸を広げ，訪れる学生には隔てなく教育を授けたものだ．ここも，その内に大学院が設置され博士を生み出す時代が来る．そのような大学にするため，君らには参加してもらっているのだ”と述べられた．また，当時の限られた人数の教員では，多岐に亘る電子工学の専門分野をカバーできず，新しい科目の分担や担当科目の変更に私どもが躊躇していたとき，“これが教えられなければ，博士の学位を返してこい！”とのお叱りを受けたこともあった．こうした“はげまし”や，“お叱り”の繰り返される日常を経て，私どもは専門分野から多少は外れる科目や実験を担当した経験により視野を広げ，新たに立ち上げた研究室で展開する研究の枠組みを拡大させ，教育・研究上の諸問題を解決する術を学んでいった．

有賀先生のもとでの情報工学への取組み，土屋先生・川上先生のもとでの大学院増設申請へ向けた研究活動の活性化，そして電子工学専攻修士課程開設への取組みと瞬く間に10数年が経過した．90年代に入り，科学技術の高度な発展が理工系専門教育・研究機関自身の改革を要請する状況となり，教育・研究の高度化をどの様に推進するかが理工系大学の最重要課題となって，自己点検・評価とこれに基づく将来構想が次々と報告されるようになった．

93年度にスタートした博士後期課程は本年度をもって完成年度を迎え，4名の博士を送り出す論文審査の日程も近付いている．この大学に赴任し新たにスタートさせた研究課題が結実し，自立して研究を行うことのできる高度な技術者を養成できる時代が電子工学科に訪れることを見越し，学生ばかりでなく私ども“若手教員”を指導された諸先生方に深く感謝するとともに，初期の苦労を共にし他大学や研究機関はじめ先端企業の技術者として移籍された若手教員・助手の方々，支援いただいた事務局の方々に感謝する．大学と共に成長することができた20年間を一つの節目とし，新たな課題に挑戦する活力が湧き出す源泉として厚木キャンパスの教育・研究活動を位置付け，今後とも本学の発展に寄与したいと考える．

1996年10月8日